

岐阜女大家政 ○中野迪代

海の博物館 野呂純子

目的 中京圏は京浜、阪神と並んで3大都市圏と言われるが、住宅事情に関しては大きな開きがある。民間分譲集合住宅（以下マンションと呼ぶ）についても同様であると考えられるが、本報告では中京圏の中心都市、名古屋市におけるマンションのプラン特性を把握し、そのあり方を探る基本資料を得ることが目的である。

方法 名古屋市16区の中でマンション供給量が多く、地区特性の明確な中区（商業地区）千種区（住宅・商業併存地区）天白区（住宅開発地区）について、昭和41年～61年に分譲されたマンションの1/5をランダムに抽出した91物件、852プランを調査対象とした。41年～45年分は中日新聞広告欄から、46年～61年分は広告代理店（株）創芸所有のリストおよびパンフレットを使用した。なお、昭和61年に大阪市立大学槻浦研究室を中心に行われた「阪神民間分譲マンション住戸プランの変化に関する研究」を比較資料とした。

結果 1) 一棟当り戸数49戸以下の物件が約80%を占め、住戸専有面積70～90㎡と阪神地区より約10㎡広く、間口奥行き比が低く、外開口部は多い。2) 阪神地区では2列型が主流であるが、名古屋市では2列3段型について3列3段型が多い。中区はその傾向を中心に1列～6列まで幅広く分布し、千種区は3列以上が多く、天白区は2列型が多い。3) 年代とともに、一棟当り住戸数は減少、住棟別プラン率（プラン数/住戸数）は増加、列段型プラン数は減少、間仕切りの位置によるタイプ数は阪神地区の1.5倍～2.5倍と多い。阪神地区より住戸プランの微妙な多様化が進んでいる。4) 名古屋市のマンションは戸数規模小、住戸専有面積大、開口部大、平面プラン多様、居室重視の戸建て住宅志向を反映したものと言えよう。